ネパール制憲議会選挙監視活動報告

阿部　和美

・ カトマンズ到着

4 月 3 日正午過ぎ、カトマンズ空港に到着。小さな空港で、外に出るとホテルの車が待機していた。タイで会ったインドネシアからの監視員も同じ飛行機で、少し安心しながら市内のホテルへ向かう。四方を囲む山を見ると、ネパールに来たんだなとしみじみと感じる。ホテルのエントランスには「ＡＮＦＲＥＬ」の垂れ幕が堂々とかかっていた。早速裏庭に連れて行かれて、ファイルとＩＤカード、ルームキーを渡される。地域ごとに分けられた三つのテーブルにある山積みのファイルが、今回のミッションの規模の大きさを感じさせる。ようやく部屋で一息つきながらルームメイトの到着を待っていると、韓国人の女性がやってきた。東南アジア出身者などと比べればずっと親近感が湧くが、見た目は近いのにお互いたどたどしい英語でしか会話をできないところがもどかしい。

（ホテルからの風景）

夜はウェルカムパーティー。広間には、これから始まるミッションへの興奮を隠しきれない様子の監視員が大勢集まっていた。22 カ国から 80 人のＳＴＯが参加している。今回は東アジアの韓国、台湾、香港からも参加者がいて、前回のタイミッションと比べるとなんだか頼もしい。自分のテーブルのメンバーの名前を覚えるだけでも一苦労しながら、国ごとに簡単な自己紹介を済ませて次の日からの研修に備えて早々に終了。

他のオブザーバーは早々に終了だが、私は役員会議に出席。InterBand は ANFREL の役員だが、代表がまだカトマンズに到着していないので代表代理として出席することに。これまでの経緯を一切知らない私は、会議の内容が全く飲み込めない。ANFREL の今後の活動方針や組織について話し合っていたが、ただ出席しているだけ。だが先ほどまでのパーティーからは窺えない ANFREL 内部の緊張した様子がよく分かった。ANFREL は組織を立て直し、大きく成長しようとしている。

・ ブリーフィング

4 日、5 日はホテルに缶詰でブリーフィング。朝から晩までスケジュールが詰まっていて、ネパールの選挙管理委員長から国連特別代表まで、そうそうたる講師がやって来る。今回のネパール選挙には約 700 人の国際監視員が参加しているが、その中でも LTO・STO 合わせて約 100 人の監視員を派遣しているANFRELの監視団は最大規模だ。ブリーフィングの様子は新聞にも掲載され、ネパールメディアの注目度も高いことが分かる。

（ブリーフィングの様子）

さすがに 1 日中英語で研修を受けていると、みんな顔に疲れが出てくる。2 日目は具体的な調査の方法や安全面確保の説明。派遣先への行き方も、40 組 40 通りの説明が必要で、説明する側はもちろん聞いている側も大変だ。航空券と地図、経費と救急箱を渡されて、いざという時はインドへ逃げろという指示まであった。南のタライ平原は不安定な状況が続いているため、細心の注意が必要なのだ。南へ派遣される監視員たちは、終始緊張した面持ちだった。

・ シンドゥリへ

私の派遣先は、カトマンズから東へ少し行ったシンドゥリ（Sindhuli）地区。カトマンズから地図上はそんなに離れていないが、山を越えていくため車だと 10 時間以上かかるらしい。飛行機で一度南のタライ平原にあるジャナプールへ向かい、その後車でシンドゥリを目指す。派遣先がシンドゥリだと話すと、ネパール人皆ナイスエリアだと言う。

出発の日、カトマンズは雨。どんどん監視員が出発していく中、自分の出発時間が来るまでが異様に長く感じる。なんとも言えない緊張感。そわそわと落ち着かず、これから日本に帰る旅行者の方と話して気を紛らわす。国内線は英語の放送がなく、なかなか来ない飛行機をひたすら待ち続ける。ようやく準備が出来たのは定員が 20 人弱の小型飛行機で、

（左右 1 列ずつの小さな飛行機）

耳栓のための綿が配られた。機内は揺れが激しく異常に暑く、おそらく 30 分程度のフライトだったがほとんど記憶がない。

疲れきって着いたジャナプールは猛暑。立っているのがやっとという状態だが、これから重要な仕事が待っている。通訳とドライバーに仕事内容を説明し、給料の交渉をし、契約書を交わすのだ。通訳はすぐ見つけられたが、肝心の車が本部の手配していたものと異なる。通訳に問いただすが何があったのかさっぱり分からない。炎天下の中では話も進まず、とりあえず食事のできるところへ移動。どうやら手配していた車は昨日事故に遭い、急遽通訳が別の車を探してくれたのだ。そしてなぜかドライバーの雇い主が同席し、彼と契約を交わすことに。何とか話はまとまったが、なんとドライバーはインド人、車はインドナンバー。ジャナプールのようなインド国境沿いでは、このようにインド人が毎日働きに来ているという。明日朝一で選挙管理委員会に手続きにいくことになったが、果たして無事承認されるのか一抹の不安が残る。

ようやくシンドゥリへ向かえると思ったら、今日は行けないと言う。なぜ行けないのか何度聞いてもよく分からないまま、もう日も落ちてきたので 2 時間ほどかけて宿へ。今後のスケジュールを話し合う。シンドゥリは 3 つの選挙区からなる比較的大きな地域で、シンドゥリガリという中心都市が真ん中に位置している。選挙当日まで 3 日間しかないが、1 日は山中の様子を見るためトレッキングをすることに。朝晩本部に連絡をするよう指示があったが、ここは渡された SIM カードがつながらないため連絡の仕様がない。大まかな予定を立てて、ようやく部屋へ。

・活動開始

（宿からシンドゥリに向かうまでの民家）

4 月 7 日、今日はまず選挙管理事務所へ。車の登録が無事終了しないと活動できない。昨日シンドゥリへ行けないと言われた訳がようやく分かった。シンドゥリガリまで宿から 2 時間かかるのだ。早朝に出発予定だったが、予定の時間になるとドライバーが見当たらない。必死に探すが見つからず、待つこと 1 時間、ようやく戻ってきた。貴重な時間が過ぎてしまった。彼に彼のなすべき仕事を根気強く説明する。もちろん通訳が主旨を

理解していないと伝わらない。このような仕事に慣れていない彼らに我々の目的や彼らの役割を理解させるのはしばしば非常に難しいが、いい活動をするには不可欠なことだ。ドライバーはインド人なので、ネパール語を話せない。偶然通訳が独学でヒンズー語を勉強したことがあったので、何とかドライバーとコミュニケーションを図ることができた。

すぐそこは絶壁というような道路を進んでいくと、EU の監視団を発見。ポーランド人とベルギー人の監視員だった。さすがに彼らはいい地図を持っていて、比較的平和なシンドゥリ地区の中でも難しい地域を教えてもらう。そこへ行けるか通訳に尋ねたが、たどり着くだけでもトレッキングで 5 日間、7 日間という場所ばかり。大きな地区なのに道路は南側に一本あるだけ。他の地域は全て no road。渡された地図はほとんど使い物にならないがここで手に入れることもできず、通訳に頼るしかない。担当地区は広大なのに、活動が可能な地域は中心部のごくわずかな場所に限られており、どの監視団も同じようなところしか監視できない。

（CPN-UML が手配したバス）

シンドゥリガリの事務所をあちこちまわったが、なんとか無事に登録を終えることが出来た。この日は選挙活動ができる最後の日で、街の中心部では CPN-UML が集会を開いていた。付近で各政党の旗を掲げたバスを数多く見かけた。政党の旗のあるバスはもちろんその政党が手配したものだが、誰でも無料で乗れるそうだ。炎天下の中、多くの老若男女が政党の旗を持ってキャンペーンに加わる姿に、日本人が失くしたものを見たような気がして胸が熱くなった。

（上：キャンペーンに加わる女性たち）

（右：続々と支持者が集まってくる）

この日はシンドゥリガリのある選挙区 2 をやや北上。途中でキャンペーン中の選挙区 2 のマオイスト候補者ガジュエルと会う。彼は中央政府の一員でもあり、この地区では非常に著名な教育者だ。彼の兄弟もまた私立学校を設立し、熱心に英語教育を行っている。今まで地下活動をしていてあまり顔を知られていないため、今日は家々を訪れているのだそうだ。

（ガジュエル氏のポスター）

投票所に向かう途中、休憩している投票所スタッフの一団に出会った。彼らは投票所まで投票所や準備物をもって徒歩で向かうと言う。所長とスタッフ、そして警察。これから数時間歩いて投票所に到着したら、投票日まで泊まりこみだ。大きな投票箱と荷物を担いで山道を進まなければならない。サリーをまとった若い女性が警備員というのには驚いた。

（先頭は所長、後ろが警備員たち）

近くの村まで歩いてインタビューをする。訪ねた家には女性と子どもたちしかいなかった。日中は多くの男性が働きに出ているが、この家の父親は 2 年前にカタールに出稼ぎに行き、今年の夏に帰ってくる予定だと言う。多くの男性が海外に出稼ぎに行くようだ。この村のある年老いた女性に選挙に行くかと尋ねたところ、「私の権利だもの」と何を聞くのかというような口調で答えが返ってきた。こうした意識が、民主的な選挙の成功を導き、やがてその国に新たな時代をもたらすのだろう。

ネパールの人々は概して友好的で、警戒感も持たずに色々と話してくれる。驚いたのは、こんな田舎の村でも、小学生低学年くらいの子どもたちが英語で話しかけてくることだ。教育にお金をかけている日本人より、はるかに流暢に話しているし、実際使えている。このような教育は、今後ネパールの将来に大きく貢献するだろう。

・日本政府の支援

2 日目、毎日シンドゥリまで往復 4 時間もかけていられないので、シンドゥリガンジにある小さな宿に移動。EU の監視員もここに滞在している。一泊分は部屋を確保できたので、朝荷物を運び込む。その作業で今日もあまり時間がない。シンドゥリ地区の中心都市とは言っても、一本の道があってその沿道にお店があるだけだ。15 分も行けば携帯は圏外。もちろんネットもつながらない。一日中ほとんど圏外なので、夜になると本部から何度も連絡が来る。

（ほとんど車は通らない立派な道路）

今日は出来る限り北へ向かう。山を越えていくのだが、日本政府が作った素晴らしい道路が続く。山の頂上までネパール一と言ってもいいような道。ところが反対側はまだ建設中で道が無い。投票所も見当たらない。水も手に入らないような何も無いところをひたすら進む。遂に道らしいものが途切れた。走っているのは、本来は水の通り道である川。どこを進んでいるのかもよく分からず、暑さと疲れで会話もなくなっていたが、小さな清流を見つけて 5 分ほど休憩。手を洗ったり顔を洗ったりと気分転換になった。ネパールは本当に水資源が豊富だ。

（村へ案内してくれた老人）

ようやく一人の老人を見つけて、彼の村に案内してもらうことに。彼の村には 2 つの投票所があり、準備は万端で、警察が投票箱を管理している。投票所の所長は選挙法についてよく理解していて、特に問題はなさそうだ。この村に泊まりこみで活動しているネパール NGO の監視員に出会った。本来ならこのような村に泊まって、今日は 5 時間歩いてあの山の集落へ、明日は向こうの集落へというような調査をしたいところだが、STO は選挙当日の監視が最大の目的なのでそこまで望むのは難しい。

（上：管理体制と投票箱・準備物をチェック）

（右上：この村の長老たち）

（山の上にある投票所）

帰りに山の頂上にある集落へ。頂上にはマーケットがあり、一日中活気に溢れている。そこで育てば当然のことなのだが、子どもたちは失神しそうな絶壁を素足で平気で駆け回っている。見ているこちらが冷や冷やしてしまう。この集落の人々は、私が日本から来たということを知ると何人かの技術者の名前をあげ、何度も何度も頭を下げていた。この地区は道路を見れば一目瞭然だが、それ以外にも日本政府が莫大な支援をしたそうで、多くの農民の暮らしはかなり豊かになったらしい。

・選挙区３へ

今日から cooling day で、政党の選挙活動は禁止されている。今日は移動可能内で最も遠い選挙区 3 へ向かう。選挙区 2 と選挙区 3 は大きな川で区切られているが、乾季の今は川が干上がっているのですぐに渡れる。もし雨季だったら、川の向こうに渡るのに何時間もかかるのだ。途中立ち寄った投票所では、一昨日投票箱を担いで行くのを見送った一団が準備を終えて当日に控えていた。

スタッフの一人が道案内として同乗してくれた。そこから先は道路が無い。一応車の轍はあるのだが、起伏が激しくぬかるみだらけで、タイヤがパンクした EU 監視員の二の舞になることを恐れて徒歩で向かうと主張したが、ネパール人は平気な顔をして問題ないと言う。冷や冷やしながらもなんとかその道を切り抜けると、目の前に広がるのは昨日より何倍もある巨大な川、もちろん干

上がっているので水はない。雨季になれば巨大な川になるような、大きな石がごろごろ転がっているところを車で進む。もうシートに座っているというより、過激なアトラクションに乗っている気分。2時間も乗ったのに、進んだのは15km。そんな状況でも疲れていれば眠ってしまうから人間はすごい。

（まるで砂漠の中にいるような気分）

ようやくたどり着いた村は、魚の獲れるところ村だった。投票所の準備は、資材の到着が遅れているためまだ完了していない。こちらは限られた時間の中でなるべく多くの投票所を訪れたいのだが、どの村へ行っても通訳の知り合いがいて、時には十数年ぶりの再会、ついつい話し込んでしまって我々が時間をもて余すということがしばしば起こる。注意すれば彼も気をつけるのだが、その場に行けばついつい盛り上がってしまうのだろう。地理も所要時間も分からない我々は、彼がいなければどの方角に進めばいいかも分からない。次の投票所がどこにあるのか、どれだけかかるのかという情報を入手するだけでも、通訳に伝え、彼がその村人や友達に伝え、話し合い、5分10分と経過してしまう。彼が我々の意図を正確に理解していないこともしばしばあり、混乱や誤解が生じるのが常だった。

次に訪れた集落は、車で行くことができなので30分ほど歩いて向かう。本来川底である場所を歩くというのは何とも不思議な気分。足場は平らなところが全く無いのに、通訳はサンダルで軽々と進んでいく。太陽の光を反射して一面真っ白で、まぶしくて目を開けていられない。太陽の光がぎらぎらと照りつけ、下からの熱気も凄まじく、風は全く無い。まるで砂漠にいるような感覚。村に着くと田が広がっており、目に優しい緑と涼しい風が心地よい。

選挙の準備は問題なく進んでいたが、ここはマオイストの勢力が強いのか、村のあちこちにマオイストのポスターや落書きがある。選挙準備のためにその上から別の紙が貼られているが、隠しきれていない。
後から通訳に聞くと、その村はマオイストの支持率が95%以上だと言う。シンドゥリガンジからそう遠い訳でもなく、他の監視団もいないので、当日はこのルートを回ることに。

宿に帰ってから EU の監視員と当日の打ち合わせ。ルートがかぶらないようにするためだ。明日の成功を祈念して乾杯。

・選挙当日

6 時に宿を出発。通訳の選挙区がシンドゥリガンジから近く、彼の投票もあるのでそこでオープニングを監視することに。投票所に着くと既に長い列ができていた。準備もほぼ整っていて、ネパール NGO の監視員が何人も待機している。全て順調に進んでいるということだ。7 時、投票開始。人々は興奮しているのか、列の先頭が押し合いになりながらどんどん前に来るので、受付が非常に混乱している。時々投票のプロセスの分からない女性がいると、スタッフが教えるのだが、ブースの中まで一緒に入ってしまい、誰に投票しているのか丸見えだ。

（左上：非常に混雑する投票所）

（左下：投票所の中に列ができていて、誰がスタッフかも分からない）

（既に名前がチェックされており、投票できないと言われて困惑する老人）

（ブースの後ろから中の様子が丸見えだ）

投票所の中でも列が出来てしまったり、間違って出口から出なかったりという些細な問題はあったが、どこかの政党が妨害すると言ったような深刻な問題はない。そんなに緊張した感じも無く、通訳の投票が終了するのを待って次の投票所へ。どの投票所も大きな問題はなく、順調に進んでいた。時々並んでいた有権者の名前が既にチェックされていたり、ブースの中の様子が外から窺えたりという問題はあった。

（投票箱が一杯で入りきらない投票用紙）

投票は 17 時までだが、お昼までにほとんど混雑は解消し、後は閑散としている。気になったのは、制憲議会選挙にも関わらず、投票率が約 50%程度だったことだ。理由としては多くの男性が朝早くから働きに出ていて村にいないこと、投票所の場所が悪いことなどが考えられる。当日はバスの使用が禁止されているため、投票所まで片道 5 時間かかる集落もあった。

（炎天下の中長い列を作り順番を待つ女性たち）

川の道も 2 日目となると慣れたもので、乗り方のコツがつかめた気がする。車が泥沼にはまりひやっとした場面もあったが、ネパール NGO の人たちと車を押しながら脱出。監視活動は無事に進み、朝と同じ投票所でクロージングのプロセスを見守る。17 時になると、拍手が起こる。その後警察が投票箱を運び込むために待機。所長は淡々と片付けを進めるが、各政党代表が確認の署名をし終わった後、マオイスト代表の青年が文句をつけてしばし作業が中断。我々が選挙法の内容を伝えると、彼も納得して引き下がった。

（17 時になり拍手の起こる投票所）

（所長の署名のある余った投票用紙の処理の仕方をめぐって口論）

18 時、ようやく撤収作業が済み、投票箱が選挙管理事務所に運ばれる。トラックには警察の他に、投票所のスタッフと各政党代表が乗り込む。選挙管理事務所には続々と投票箱が到着。EU と国連の監視員とも再会。開票作業は来週行われるので、我々の監視活動はここで終了。宿に戻ろうとすると、街の中心部が騒がしい。一瞬緊張が走ったが、すぐに収まった。どうやらある女性が突然泣き出して、運搬中の投票箱を奪い去ろうとしたらしい。

宿に戻ってすぐに今日のレポートを作成。これをメールか FAX で本部に送らなければならないのだが、今日も FAX が使えないので、電話で簡単に報告。ようやく仕事を終え、向かいの食堂で通訳とドライバーと静かに打ち上げ。ネパールの今後について真剣に語り合った貴重な時間だった。今夜は一人で出歩くのが危険なので、通訳も家に帰らず宿に泊まることになった。

・デブリーフィング

今日から 2 日間は祝日。選挙が無事終わって皆安心したのか、いつもより人々の朝が遅いような気がする。お昼のフライトでカトマンズに戻るため、7 時に宿を出発。これから 4 時間かけて、あの暑いジャナプールに向かう。まだ詳細は分からないが、ネパール全土で特に大きな衝突はなかったらしい。空港に近づくにつれ、だんだんと空気が熱くなってくる。途中、車のエンジンがストップ。これまでの無茶を何とか耐え抜いてきたボロ車もここまでか、と思ったが、なんとか持ち直して無事に空港に到着。ここで通訳とドライバーとはお別れだ。

（ジャナプールにあるヒンズー教寺院。インド国境にあるこの地域は、気候も文化もシンドゥリともカトマンズとも全く異なる）

飛行機は到着が 2 時間ほど遅れ、カトマンズに着いた頃には既に報告会が始まっていた。一度シャワーを浴びて着替えてから報告会に出たかったが、ホテルに着くと荷物を置きに行くことも許されず強制的にランチ、そして報告会に直行させられた。監視活動の間は毎朝一杯のチャイを飲んで出発し、お昼は移動で何も食べないまま 21 時頃少し夕食、という生活が続いていたので、目の前に食事が山のようにあっても食欲が出ない。日本では暑い日に熱い紅茶など飲もうと思わないが、ここでは不思議と砂糖とミルクのたっぷり入ったチャイが、疲れを癒し安心感を与えてくれた。そして一緒に入っているジンジャーが、喉の渇きを抑えてくれた。

人数が多いので、地域ごとに 4 つに分かれて報告会。私たちの地域はほとんどが既に発表を終えていた。どのチームも大きな事件には巻き込まれず、極めて平和的に選挙は行われたようだ。地域によって、ヒマラヤの絶景を毎日見ていたチームもいる。お願いだからその話はしないでと頼みながら、シンドゥリの報告も終了。問題点としては、投票の仕方の分からない有権者がいたこと、スタッフがマニュアル通りに仕事を進めていなかったこと、監視員が見兼ねてスタッフを手伝ってしまっていたこと、17 時前に投票所を閉めてしまっていたことなどが挙げられた。また歩けない老人が山の上の投票所まで這っていったことや、息子が年老いた母を背負って山を登っていたことなども報告された。

集められた投票用紙は地域ごとに混ぜられて開票されるため、各投票所で結局何人が投票したのか、その中で無効票が何票あったのかと言うことは分からない。そのシステムも指摘された。何組かの監視員はフライトの関係で明日の午後に到着するが、待っている時間もないので今日の報告を受けて明日のお昼に記者発表が開かれる。監視活動の一連のプロセスは、記者発表を以って終了だ。

・記者発表

今日は久々にゆっくり起きた。記者発表では、今回の選挙が極めて公正に、平和的に行われたことが報告された。質問も多くはなく、早々に終了した。選挙前は、はたしてこの選挙が本当に実施されるのか、タライ平原のマデシやマオイストによる妨害が起こるのではないかなど様々な

（記者発表の様子）

懸念がされていたが、実際はほとんど問題なかった。カトマンズでは開票作業が進んでいるが、マオイストがかなりの勢いで票を伸ばしている。ネパール全土でも投票率は 60%前後で、男性が少なかった分女性の割合が多いようだ。結果的に、女性の権利も強く主張しているマオイストに票が集まったのかもしれない。

記者発表の後も経費の精算や事務手続きに追われ、観光に出かける時間もない。明日は ANFREL の総会が開かれるので、一日中会議に出席しなければならないらしい。

・総会

今日は朝から総会。ANFREL は新しい代表を向かえ、メンバーも約 2 倍に増やして組織の拡大化を図っている。今回は新しいメンバーも多く、非常に活気のある総会になった。16 時頃までかかる予定だったが、スムーズに進み 14 時頃には終了。30 分ほどで昼食をとり、その後は代表者会議へ再び代理として出席。ネパールの NGO も ANFREL の新メンバーとなったので、その承認と、今後の活動の確認を行う。モンゴル、カンボジア、バングラデシュと選挙は目白押しだが、どの選挙にどれだけの予算を充てるのか、その選挙の意義などを考えながら話し合いが行われた。これからミッションが必要になるだろうと思われる様々な国の出身者がいるため、机上の論理ではなく現実味のある話し合いができる。現場の状況を肌で知っている人物の重要性を感じた。

代表者会議も 1 時間ほどで終了し、夜の打ち上げパーティーに備えて ANFREL のメンバーと買出し。30 分ほどだったが、タメルというショッピング街を訪れた。私の観光はそれだけだったが、会議のない参加者たちは市内を思い思いに観てまわったようで、パーティーにはネパール衣装を着て参加しているメンバーもいた。こういう場で伝統衣装を着られないのは残念だ。パーティーには国連ネパールミッション特別代表のイアン・マーチンも出席した。みんな達成感に満ち溢れた顔で、ダンスをしたり歌を歌ったり、楽しい時を過ごしていた。

（国連告別代表イアン・マーチン氏と）

再来週には選挙結果が出揃うだろう。マオイストが第一党になったとしても、彼らにどの程度の政権運営能力があるのか。マオイストに反対する勢力や国外からの圧力にどう立ち向かうのか。むしろ選挙後の動きに注目すべきかもしれない。世界中が注目しているネパールの動向は、少なくともアジアの中で新しい動きとして認識され、やがて世界の中でも大きな流れを生み出していくのかもしれない。選挙プロセス自体は成功だが、非常に重大な歴史の瞬間に立ち会うことができた。

（ネパール衣装を着た女性監視員たち）

（ANFREL のスタッフと監視員たち）